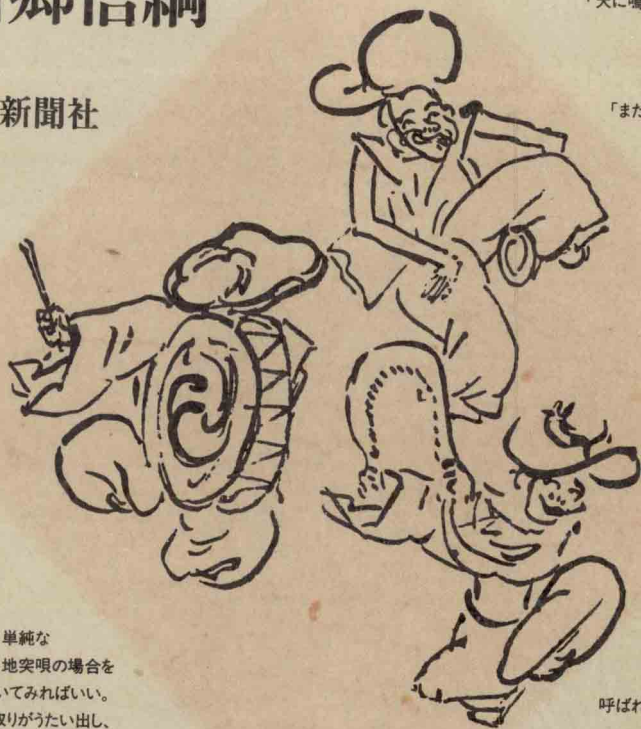


古代の声

うた・踊り・市・ことば・神話

西郷信綱

朝日新聞社



天に鳴響む大主 うた
明けもどろの花の 咲い渡り

あれよ 見れよ 清らやよ
「天に鳴響む大主」は太陽のこと、

「明けもどろの花」は
日の出の美しさの比喻。

モドロは「みだる」とか

「まだら」とかと同系統の語で、
ここでは渦状に光が

散乱し目も

眩むような

美しさをいう。

踊り 単純な
地突唄の場合を

念頭においてみればいい。

まず音頭取りがうたい出し、

それを受けて綱子たちは

「ハ、ヨイサノヨイサ」といった

掛け声よろしく一斉に綱を引く。

作業のリズムは掛け声にしたがい、

その間を音頭取りの歌がとりもつ。

初期の舞踊歌もこの形式を共有する。

市取引には 市
セリと

呼ばれるものが固有であった。

市で人びとは相手方に

悪態をついたり、その産物に

ケチをつけたりしながら交易する。

こうした関係は、記号論的に

ほぼそのまま歌垣における

男女の関係に移して考えることができる。

古代の声

うた・踊り・市・ことば・神話

西郷信綱

朝日新聞社

西郷信綱 さいごうのぶつな

1916年生。東京大学文学部卒。古代文学専攻。
著書『日本古代文学史』『古事記の世界』（ともに岩波書店）、『古事記研究』『詩の発生』『古典の影』（以上、未来社）、『梁塵秘抄』（筑摩書房）、『古代人と夢』『神話と国家』『古事記注釈』Ⅰ、Ⅱ、『源氏物語を読むために』（以上、平凡社）ほか。

古代の声

うた・踊り・市・ことば・神話

著者／西郷信綱

昭和60年6月20日第1刷発行

発行者／川口信行

印刷所／共同印刷

発行所／朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2 電話03(545)0131(代)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

定価／1300円

© NOBUTSUNA SAIGŌ 1985

ISBN4-02-255358-8

Printed in Japan

目次

市と歌垣…………… I

資料 市と境 市と歌垣の相関 筑波

山のカガヒ 歌垣から踊り念仏へ

アヅマとは何か…………… 37

地名起源譚としての「アヅマはや」 妻と

端の連動 二つの辺境 アヅマとサツマ

坂・境・峠 宮廷と辺境

枕詞の詩学…………… 75

枕詞の謎 枕詞をどう定義するか 口承

的言語の力学 「大和」にかかる三つの枕

詞 「八雲立つ」と「やつめさす」の対

立 韻律単位の問題 古代歌謡における

枕詞 柿本人麿と枕詞 再び枕詞の不思議

議さについて

オモロの世界……………127

オモロと未詳語 詩形の問題 歌と舞

踊 祭式歌謡としてのオモロ オモロの

本義 オモロにおける宗教思想

古代研究の罫……………193

固定観念 誤読の歴史のなかで 観念に

よる上空飛行 構造的連関の発見

あとがき

初出一覧

索引

装幀 山崎登

市と歌垣

一 資料

市との相関關係に焦点をしぼらぬかぎり、歌垣の本質は見てとることができないだろうと私は考える。それも市には人が集る、だからおのずとそこに歌垣もありうるというような平べったいものではなく、その相関關係は、もっと構造的に古代の生活や社会に深く根ざしていたはずである。本稿ではそのへんに探りを入れ、歌垣のもっていたであろう本来の意味をとらえ直してみたいのだが、ぞんがい大きな射程がかくれていそうな気がする。まず便宜上、おもな資料をあげておく。資料といってもよく知られたものばかりで、別に目あたらしいものではない。要はそれらをどう読み、どう解釈し、どう組織するかにかかっている。従来、とんでもない失錯を知らぬ間に犯しているといった点が果たしてないかどうか。ほぼ世間周知の材料を今さらこうして並べてみると、逆にそれらが不思議と急に異化してゆくように感じられないだろうか。軽くないなさず、やはりとくと、これらに目を通していただきたい。

(イ) 武烈天皇が太子であったとき、鮪シビ(平群大臣真鳥の子)なるものと影媛を争い、「海柘榴ツヅバキ

市の巷」で「歌場の衆に」立ち歌をかけあったとあり、両者の歌七首をのせる（武烈紀）。古事記ではそれが袁祢命（顕宗）のことになっておりツバキ市の名も見えぬが、兩人が「闘ひ明し」とあるのが注目される。

(ロ) 海石榴市の、八十の衢に、立ちならし、結びし紐を、解かまく惜しも

(万葉集一二・二九五)

(ハ) 紫は、灰さすものぞ、海石榴市の、八十の衢に、逢へる児や誰

(二二・三二〇)

たらちねの、母が呼ぶ名を、申さめど、道行く人を、誰と知りてか

(二二・三二〇)

(ニ) 筑波嶺に登りて嬬歌会をする日に作る歌

鷲の住む、筑波の山の、裳羽服津の、その津の上に、率ひて、未通女壮士の、行き集ひ、かがふ嬬歌に、人妻に、吾も交はらむ、あが妻に、他も言問へ、この山を、領く神の、昔より、禁めぬ行事ぞ、今日のみは、めぐしもな見そ、言も答むな

(九・一七五九)

(ホ) それ筑波山は、高く雲に秀で、最頂は西の峰岬しく高く、雄の神といひて登らしめず。ただ東の峰は四方磐石にして、昇り降りは険しく屹ちたるも、その側に泉流れて冬も夏も絶えず。坂より東の諸国の男女、春の花の開くる時、秋の葉の黄づる節、相携ひ駢闐り、飲食を持来て、騎にも歩にも登り、遊樂しみあそぶ。その唱にいはく、

筑波嶺に、逢はむと、言ひし子は、誰が言聞けばか、み寝逢はずけむ

筑波嶺に、廬りて、妻なしに、我が寝む夜ろは、早も明けぬかも

詠へる歌いと多くして載するに勝へず。俗の諺にいはいはく、筑波峯の会に、婿の財を得ざれば、

児女とせずといへり。

(常陸風土記、筑波郡)

(へ) その(香島郡)南に童子女の松原あり。古、年少き童子ありき。(中略)男を那賀の寒田の郎

子といひ、女を海上の安是の嬢子と号く。(中略)名声を相聞きて、望念を同存くし、自愛む心

滅せぬ。月を経、日を累ねて、嬬歌の会、俗、宇太我岐(ウタガキ)といひ、又、加我毗(カガヒ)

といふに、邂逅に相遇へり。時に、郎子歌ひけらく、……(歌略)……。嬢子、報へ歌ひけらく、

云々。

(同、香島郡)

(ト) 謂はゆる高市、此より東北のかた二里に密筑の里あり。村の中に浄泉あり。俗、大井とい

ふ。夏は冷かにして冬は温かなり。湧き流れて川と成れり。夏の暑き時、遠近の郷里より酒と

肴とを持来て、男女会集ひて、休ひ遊び飲み樂しめり。その東と南とは海辺に臨む。アハビ・

ウニ・魚貝等の類、いと多し。西と北とは山野を帯ぶ。椎・櫟・榲・栗生ひ、鹿・猪住めり。凡て海

山の珍しき味、悉に記すべからず。

(同、久慈郡)

(チ) 葛井、船、津、文、武生、蔵六氏男女二百卅人、供奉歌垣。其服並着青摺細布衣、垂紅

長紐。男女相並、分行徐進。歌曰、ヲトメラニ、ヲトコ立チ添ヒ、踏ミナラス、西ノ都ハ、

ヨロヅ世ノ宮。……。毎三歌曲折、拳袂為節、云々。

(続日本紀、宝龜元年三月)

二 市と境

右の（イ）（ロ）（ハ）に見えるツバキ市は三輪山のふもとにあり、北は山の辺の道、東は伊勢・都祁・宇陀からの道、南は吉野・飛鳥を経てくる道の集るところで、さらに泊瀬川による舟行の便もあつたから、それはまさしく「八十の衢」であつた。チマタは道が股のように分岐する場所の意。それをツバキ市というのは、椿がそのあたりに群生していたためである。一般に市には樹が必ず生えていたらしく、無いときは「東の、市の植木の、木足るまで」（万葉三・三一〇）とあるように植樹したもののものである。木蔭を利用するほか、それは市の一つの目じるしであつたのではないかと思う。

このツバキ市の名は、平安朝になつてもよく知られていた。源氏物語には、夕顔の侍女右近が、筑紫から逃げるようにして上つてきた玉鬘（夕顔の遺児）の一行とこの市の宿で、パツタリめぐり逢うという話がある。物語のなかの話だけれど、市が別れ別れになつていたものたちの出逢う場であつたことを示している点で興味ふかい。さらに蜻蛉日記や枕草子にもツバキ市——当時はツバ市と呼んでいたらしいが——のことが見える。だが平安朝のツバキ市は、長谷観音に詣でる人びとが燈

明や供物を買いととのえるため足をとめる宿として出てくるのであって、記紀万葉のツバキ市とはやや趣を異にする。両者は歴史的にはわがちがたいはずだが、いちおう別途に扱う方がいい。私の主題はあくまで、歌垣のおこなわれたというそのツバキ市に限定される。

だがそれにしても市とは何か。便宜上まずイチの語義を検討しておきたいのだが、これをイツク（斎）と結びつけてとく説がひろく行われている。民間の巫女をイチコともイタクとも呼ぶ。この巫女が神をイツクこととイチ（市）という語は関連があるだろうとするわけだ。何れ後でふれるが、市には市神がまつられていたし、市が一種独自の聖域であったのは確かだけれど、そのことが果たしてイツクという語と範疇的に包みあうかどうかは、かなり疑わしい。宮廷が伊勢神宮をまつるのはイツクである。斎宮をイツキノミヤという。三輪氏が大物主神をまつるのもイツクである。イツクとは身を淨めて神、それもおそろくは己が祖神に仕える意と解される。その語感は、イツキムスメ（秘蔵娘）といういいかたなどにも保存されている。かりに巫女が市で何らかの神わざをしたにしても、だからそれをイツクとはとうてい呼べないはずである。というより、ありようはむしろ逆であり、イチに出入りする巫女だからイチコ、イタク——イタクという語の由来につき難しくいろいろいわれているが、それはイチコの変化形に違いない——と呼ばれたのではなからうか。それをイチンドあるいはたんにイチと呼ぶ地方もあるらしい。昔の歩き巫女は各地の市を遊行していたに違いない。琵琶法師に覚一・定一・慶一などイチを名のるものが多いのも、おそらく市と関連がある。

イック(齋)からイチ(市)を解こうとする語源説は、こうして御破算になると思う。市というものが歴史的にもつている意味とも、それは適合しない。この語源説がのさばりすぎたため、市にたいする私たちの認識に大きな曇りが生じた点さえあるように思う。不確かな語源から天降つて考えるより、イチ(市)、ミチ(道)、マチ(町)等が語構成を同じうし、「チ」を共有している言語上の事実注目することこそ肝心である。そしてその「チ」はみな道に関連しているはずである。チマタ(衢)の「チ」もまたそうである。もつとも、イチ、ミチ、マチの「イ」「ミ」「マ」が何の意かは分らぬけれど、しかしイチが祭祀ではなく道にかんじていることだけは疑えない。そのへんの消息は、(ロ)(ハ)の「海石榴市の、八十の衢」といういいかたじたいからも容易に読みとれるだろう。そして実はそれで充分なのだ。市というものの本義をつきとめるための一つの有力な手がかりが、すでにそこに存するからである。

今日の語感とは違い、チマタは古代では境という觀念に強く結びついていた。道饗祭祀詞にいう、「大八衢に湯津磐村の如く塞り坐す皇神等の前に申さく、八衢比古・八衢比売・久那斗と御名は申して辞竟へ奉らくは、云々」と。前提になっているのは、もとより記紀神話である。黄泉国を訪ねたイザナキが追われて逃げかえるとき、黄泉平坂に「千引の石」を引き塞えたところがあるのがすなわちそれで、この石を「塞り坐す黄泉戸大神」(記)ともいうとある。あるいはこのイザナキの禊のとき、「投げ棄つる御禪に成れる神の名は道俣神」(記)ともある。何れにせよ右の祝詞に見える八衢比古

以下は、黄泉国とこの世の境にあつて——「黄泉比良坂」の「坂」はいうまでもなく境の意である——黄泉国から荒びくる邪靈を防ぎとめる神にほかならず、その実体は大きな石であつたと思われる。さらに記紀のいわゆる天孫降臨の条には、猿田彦が「天のヤチマタ」に居て迎えたところ、このチマタもまた紛うかたなく境を表わしている。チマタをたんに股のように道の岐れるところとするだけでは、辞書的な解釈を一步も出ていないことになる。それは世界を仕切る境としての辻であつたのだ。そして古代ではこの世を他界から仕切る境と、共同体をその外から仕切る境とは相似形としてかさなり、同じ性質の空間と考えられていた。

物資の交換や取引のおこなわれる市がチマタに立つゆえんも、おのずから明らかである。各共同体の内部、その成員間に市は必要でない。外部との交換関係にうながされて初めて市というものが必要になる。「商品交換は各共同体の尽きる処に、換言すれば各共同体が他の共同体またはその成員たちと接触する点に始まる」(資本論)といわれる。だがむろん、古代の市で交換されたのは商品ではありえない。分業の未発達な古代の村々は多分に自給自足的であり、商品生産はまだ行われていなかった。しかし農村、山村、漁村を典型とする、地理的条件に制約された自然的分業——とくに海岸線が長く入りこみ山地の多い日本ではこの傾向がいちじるしかったのではないかと思う——がそこに存したかぎり、自給自足で生活の一切がまかなわれるのは不可能である。食料はもとより、各種の石器を作るための石材とか、あるいは土器の工房とかにしても、各地に満遍なくゆきわたつ

ていたはずもない。有無相通ずる交換関係は、相当古い時代から村々の生活の必要な一部をなしており、各共同体間にはある種の循環する力が働いていたと考えられる。KulaとかPotlatchとか呼ばれる原始的交換や贈与について、マリノフスキーやモースらの試みた研究がここに想起される。日本語でもアタフ（与）とアタヒ（徧）、カフ（替）とカフ（買）あるいはカフ（交）という語などが同源であるのは、その背後に商品経済以前のきわめて深い生活史がかくれていることを暗示する。アキナフ（商）がアキ（秋）という語にかかわっているあたりにも、たんなる語源的興味以上のものがあるといえる。

そういう循環する力の結節点をなすものが、すなわち市であった。市が共同体の内部ではなく、異質の生活がたがいに接触し、出あう境界地帯の道にたつわけもここにある。そういう意味では市も「各共同体の尽きる処に」発生するわけで、それを納得するには、右にいったツバキ市の占める位置を古代の地図にそくして、とくと眺めてみればいい。（逆に同質の生活が支配する島嶼などの場合には市は成立しにくかったらしく、たとえば瀬戸内の島々に古く市があったという形跡はないように見受けられる。必要とあらば、たぶん人びとは舟で交易に乗り出したのだろう。）

話は中世に飛ぶが、市がどういう場所に設けられたかを何よりも如実に見せてくれるのは、『一遍上人絵伝』に描く信州伴野の市庭の図である。まずその荒涼たる風景が目をつ。粗末な草ぶきの市屋が数棟たちならび、なかの一棟には一人の乞食が宿り、かたわらに三匹のやせ犬が遊び、カ

ラスが四羽その軒下で餌をあさっており、やや遠景には放牧された牛がいる。そして手前の一棟の市屋に一遍の一行が坐し、その後には非人たちが従っているといった図がらである。むろん人家など一軒も見えない。「無主荒野」に市庭の設けられた例が史家により指摘されているが、この伴野などもその一つといってよさそうである。かといって、それがたんなる荒野であったはずはない。右の図でも箱を頭にいただいて歩く女人の一行が左端に描かれているのは、そこがやはりチマタであったことを証している。(なお、この絵伝には備前福岡の市を描いた部分もある。こちらは市の立っているなかにあって一遍が勧化している図だが、これも野中であり人家は見当らない。ただ舟で荷をはこんできているものがあり、川沿いの地であった点が違う。)

自然石を以て市神とする例が多いわけも、こう考えてくれば何ら不思議でない。市神の名を市杵島姫、蛭子神、大国主命などと呼ぶのは、いうまでもなく後世の附会または再解釈である。自然石であるこの市神が境界石、つまりかつてのサへの神・道祖神の変形したものであることは、ほとんど疑う余地を残さない。ツバキ市などにも後に地蔵がまつられているのは、やはりサへの神がそこにあったことを暗示する。したがって市神と、その守護するものとしての市を共同体的祭祀の概念で律しようとする、どうしても無理が生じる。イチをイツクからとみる説は市が祭祀の場であったことを強調するけれど、しかし市に聖性があるとすれば、それは共同体の祭祀の場であったものによるのではなく、むしろ各共同体にたいし中立的な、網野善彦氏いうところの「無縁」性を市が

もっていたのにもとづくと考えねばならない。政府の設置した平城京と平安京の東西市も、市街区のなかというよりその郊外におかれていた。(ちなみに、関市令によると市は午後ひらく規定になっているが、これは交易の物資がかなり遠くからもち運ばれてくるためであろう。)

神話的にチマ、タは人体の股と等価であつたらしく、道祖神に陽物の形をした石が多いのは周知のとおりである。猿田彦の長い鼻なども、すでにそれをあらわしている。ちなみにギリシヤの境界神ヘルメスがやはり phallic symbol の石である。しかもそれが同時に市や取引の神であつた。そしてホメロスでは商人は「境を横ぎるもの」とされていると説く人もいる。境というものについての人間の経験は、ある種の共通した構造や形態をもっており、境界地帯に市が立つのも世界的にかなりゆきわたった習わしと見うけられる。

市には、せまく経済史の枠だけではとらえきれぬゆたかな多義性がある。そして歌垣もその市でおこなわれた。

三 市と歌垣の相関

では市と歌垣とはどのようにに連関するか。歌垣を共同体の農耕儀礼の一つとみる従来の見解への